

総合人間科学 倫 理 学

1 構 成 員

	平成23年3月31日現在
教授	1人
准教授	0人
講師(うち病院籍)	0人 (0人)
助教(うち病院籍)	0人 (0人)
助手(うち病院籍)	0人 (0人)
特任教員(特任教授、特任准教授、特任助教を含む)	0人
医員	0人
研修医	0人
特任研究員	0人
大学院学生(うち他講座から)	2人 (0人)
研究生	2人
外国人客員研究員	0人
技術職員(教務職員を含む)	0人
その他(技術補佐員等)	0人
合計	5人

2 教員の異動状況

森下 直樹(教授) (H14.11～現職)

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成22年度
(1)原著論文数(うち邦文のもの)	1編 (1編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(2)論文形式のプロシーディングズ数	2編
(3)総説数(うち邦文のもの)	1編 (1編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4)著書数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
(5)症例報告数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴：《雑融性》としての「成熟」—「若者世代」論から《規範的なもの》の考察へ、
哲学と現代（名古屋哲学研究会）26号、2011.2、42-87

インパクトファクターの小計 [0.00]

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1.

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 母体血清マーカー検査をめぐる医師・病院側の対応の実態と課題

—電話相談を受けた事例を通して— 奥川ゆかり、森下直貴

日本看護倫理学会 2010.6.12 札幌市

2. 実験動物慰霊祭について考える～アンケート調査の結果から～

西川 哲、森下直貴 第38回静岡実験動物学研究会 2010.10.22（三島）

(3) 総 説

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴：一ノ瀬正樹『死の所有』、図書新聞 3006号、2011.3.12

インパクトファクターの小計 [0.00]

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成22年度
特許取得数(出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成22年度
(1) 文部科学省科学研究費	1件 (420万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)

(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	0件 (0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

基盤研究 (B) 課題番号 22320004

先端科学技術の「倫理」の総合的枠組みの構築と現場・制度への展開

平成 22 ～ 25 年度

(2) 厚生科学研究費

(3) 他政府機関による研究助成

(4) 財団助成金

(5) 受託研究または共同研究

6 特定研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

1.

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	1件
(3) 学会座長回数	0件	2件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	2件
(6) 一般演題発表数	0件	

(1) 国際学会等開催・参加

1) 国際学会・会議等の開催

2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

4) 国際学会・会議等での座長

5) 一般発表

口頭発表

ポスター発表

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

2) 学会における特別講演・招待講演

3) シンポジウム発表

名古屋哲学研究会シンポジウム「人間の成熟について」

《雑融性》としての成熟、名古屋市立大学、2010.6.27

4) 座長をした学会名

日本医学哲学・倫理学会 2010.10.17 岩手医科大学

日本生命倫理学会「生命倫理再考」2010.11.21 藤田保健衛生大学

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 日本医学哲学・倫理学会：評議員

2. 日本生命倫理学会：総務委員会委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数(レフリー数は除く)	0件	0件

(1) 国内の英文雑誌の編集

(2) 外国の学術雑誌の編集

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

9 共同研究の実施状況

	平成22年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	0件

(1) 国際共同研究

(2) 国内共同研究

- (3) 学内共同研究

10 産学共同研究

	平成22年度
産学共同研究	0件

1.

11 受賞

- (1) 国際的な授賞
- (2) 外国からの授与
- (3) 国内での授賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 科研費研究会で念頭におかれている先端科学技術の「総合的な倫理的枠組み」は、たんなるリスク計算とか規制または調整といったものではなく、存在論や文化論の根本にまで踏み込んだ未来志向の本格的なものの見方である。本年度は初年度であることから、先端科学技術の全体を勉強・概観しながら視点と方法について議論を重ねた。そして分担された役割に沿って、分担者それぞれが連携しつつ独力で研究に取り組むことにした。

まず、研究の焦点を「デジタル化」（事物の微分＝合成化の徹底的な進行）に合わせた。そのため研究範囲は、物質・生命・身体・脳・心・意識から環境（自然、社会、文化）まで広がることになった。具体的には、エンハンスメントやニューロサイエンスの「サイボーグ化」、「ロボット」、「サイバー環境」、「アーキテクチャ」を総合的に考察することにした。この総合性は本研究会の特徴の一つである。

次に、人間／環境や自然／文化や個人／社会の在り様が「デジタル化」を通じて今後どのように変容していくのか、という「歴史哲学の視点」を導入した。それと同時に、既存の倫理フレーム（倫理学理論と価値理念）を表層から深層へと掘り下げることで、規範的な分割線＝境界線を存在の根本から捉え直す「垂直的な視点」をも導入した。これらも本研究会の他に類例を見ない特徴である。

以上をふまえて、「滞ることなく流れる循環」という存在観を仮設的に提示し、これをめぐって議論をした。物質の循環から、生命構成素の循環、イメージの循環、意味の循環、そしてサイバー循環まで、すべての循環が滞りなく流れるかぎり、そこに固定しないゆるやかな分割線が浮かび上がる。その上で、生命・身体・脳・心・意識の連関（分割）を捉えるために、「差異から立ち上がる高次中心化」という論理を提示し、これをめぐっても議論を重ねた。これらの発想は次年度の各自の研究のなかで深められる予定である。

13 この期間中の特筆すべき業績, 新技術の開発

1.

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

1.

15 新聞, 雑誌等による報道

1.